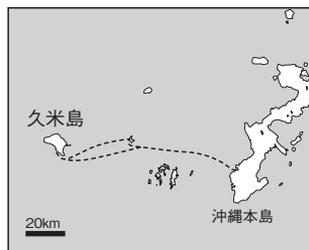


あたり前を《特別》に変える

「民泊」「ホームビジット」「島の学校」

一般社団法人久米島町観光協会 小田部 早苗



久米島：那覇市の西方約100kmの東シナ海に位置する。面積59.53km²、人口7,851人(平成30年11月末日現在)。平成14年に具志川・仲里の両村が合併して一島一町の久米町となった。森林が豊かで水に恵まれ、水稲栽培が盛んなことから、「米の島」とよばれてきた。

修学旅行生を取り戻すために始まった民泊事業

修学旅行が全盛期だった平成一五年度、久米島には、約八五〇〇名の生徒が訪れた。しかし時代の流れとともに、その数は激減し、一〇年後の同二五年にはかつての十分の一にも満たない数となっていた。この状況を打破するべく、同年一〇月に設置されたのが、久米島町ニューツーリズム推進協議会である。民泊事業は、この一環として取り組みが強化されることとなった。当初から同事業に携わり、現在も久米島町観光協会で民泊の担当をしている仲宗根麻衣子さんは、「民泊を立ち上げるといって話を動かされた私でしたが、民泊に対してはまったくの素人。何から始めて良いのかわからないなかで、まず先に行なったのが、民泊受け入れ先の確保でした。必要書類の作成、消防や保健

所への手配など、法律に沿って行なわなければならないことが、山ほどありました」と話す。

受け入れ家庭の確保にあたっては、民泊の草分けである沖縄県伊江島の担当者と呼んで、住民向けに民泊の魅力について講演会も実施。良いことばかりでなく、ビーチで遊んでいた子どもが溺れそうになった話など苦労したこともあえて話してもらった。「講演を聞いて、怖くなつてやめた家庭もありました。受け入れ先の数を増やしたいという思いはありましたが、皆さんには、命を預かる仕事なのだということを理解してもらった上で始めてほしかった」と、仲宗根さんは振り返る。

実際、住民の理解を得ることは簡単ではなかった。しかし、一軒一軒の民家を回り、とにかく説明を続けた結果、初年度(平成二五年度)は七軒の登録を得ることができた。

「一回の訪問で断られても、繰り返し足を運び、顔を合わせ、話をする。電話では絶対にダメ。顔を見て話すことが何より大事なんです」と仲宗根さん。

沖縄独特の文化が、民泊登録条件の弊害になったこともある。規程では、雨などに濡れずにトイレまで行くことができる設計が求められるが、トイレが屋外にある家庭も多いため、民家の方と一緒に、屋根をつくったこともあるという。また、久米島らしい食事にもこだわりたいと、料理研修なども実施した。

民泊により高まった島人のおもてなしの意識

平成二六年十一月、沖縄県が実施する「離島体験交流促進事業」で、中学生二八名の民泊を受け入れた。記念すべき久米島民泊の第一号である。その翌月には、最初の修学旅行生（静岡からの高校生六九名）の受け入れを行なうことになる。この時の民家の数は一八軒。受け入れ民家全員が横断幕をつくって、子どもたちを迎えたという。

仲宗根さんは、「子どもたちが島を離れる時、民家の方々は、握手をして、姿が見えなくなるまで手を振りながら涙を流しているんです。そして、最初は民泊をやることを渋っていた方が、子どもたちが帰った後に私に迫るんです。あの子たちは無事に着いたか？ 連絡したのか？ って。やはり民泊をやったよかったですと、心底思った瞬間でした」と、当時は懐かしんだ。

現在、久米島への修学旅行の数は、全盛期には及んでいない。しかし、数だけでは計れない島人の変化がある。例えば、民泊家庭の清潔さである。家の中も庭もいたるところが美しい、久米島の民泊家庭は掃除が非常に行き届いて



受け入れ民家さんたちとともに修学旅行生をお出迎え。

いる、と全国各地の民泊事情に詳しい方々が評価してくれている。仲宗根さんは、「民泊の受け入れがある前に、庭の草を刈ったりしている民家さんも多いんです。お客様に対して、少しでも心地よい時間を過ごしてほしいという島の方々のおもてなしの意識が、民泊を通して高くなりました」と話す。

平成三〇年一二月現在、民泊の受け入れ民家数は四四軒
になっている。

久米島でしかできない体験を提供

民泊の中で、久米島ならではの体験プログラムとして好評なのが「海ぶどうの摘み取り体験」である。受け入れ民家の方が海ぶどうの養殖場で働いているため、実現できた体験だ。じつは、久米島は海洋深層水の汲み上げ量が日本一。その深層水を利用して育てている海ぶどうの生産量も日本一を誇る。粒の大きさにも形にもこだわられる海ぶどうの摘み取りができる民泊は、久米島にしかない希少価値の高い商品といえる。

また面白いところでは、ラジオ番組に出演できるという体験もある。島には「エフエムくめじま」というコミュニティラジオがあるが、このラジオ局の名物パ



久米島ならではの「エフエムくめじま」出演体験。

ーソナリティーの実家が民泊の受け入れを行なっていることから誕生したプログラムである。パーソナリティーが子どもたちに、久米島についての感想を聞いたり、逆に子どもたちが自分たちの住んでいる地域や学校を紹介する。ラジオの放送は、生放送であったり、収録の場合もあるが、今はアプリを取得すれば、日本全国からエフエムくめじま

のラジオ番組を聴くことができる。修学旅行に行っている自分子どもがラジオに出演するという特別な時間を、遠く離れたところにいる親御さんも共有できる。

さらに、久米島にしかない「惣慶モヤシ^{モヤシ}」の生産現場体験プログラムもある。このモヤシは、一般的なモヤシよりも随分細いのだが、シャキシャキとした歯ごたえが魅力で、味が濃く、島で愛され続けているソウルフードである。しかし、島内一カ所でしか生産されておらず、この独特なモヤシの栽培方法は門外不出となっている。民泊では、そのモヤシの生産現場に足を踏み入れることができ、子どもたちは、モヤシの栽培作業や収穫作業を手伝い、袋詰めをして、民家の人と一緒に島内のスーパーなどに卸に行く。

デイサービスに勤務している方の家では、子どもたちがグループで施設へ遊びに行くという体験がある。久米島のおじい・おばあの前で、ゲーム

をしたり、校歌を歌ったりするのだ。仲宗根さんは「子どもたちが、紙に書かれたモノをジェスチャーで伝えるゲームでは、おしい・おばあが頑張って答えようとするんですけども、その回答が珍回答だらけで、もう参加者全員で大笑い」と笑顔をつくる。

民泊の入り口となっているホームビジット

現在、久米島町観光協会では、民泊のほかに、「島のひと遊ぶ・学ぶ」をモットーとした体験プログラム「島の学校」、民家に旅行者や修学旅行生を迎え入れ島の普段の生活を体験する日帰りプラン「ホームビジット」も別組織から事業を継承し運営している。

「島の学校」では、三線教室やおやつづくり教室、シーカヤックや洞窟探検ツアー、久米島紬草木染め・織り体験などのさまざまな体験プログラムがある。特に島を訪れた子どもたちに人気なのが、漁協とのコラボレーションで実施されている「底引き網体験」だ。ただ網を引くだけでなく、そこで獲った魚のウロコやハラワタを自分たちで取り除き、宿泊する民家に持ち帰って一緒に料理をつくるというものである。ちなみに「ウロコ取り」は、自分たちが飲んだペットボトルのキャップを再利用している。見たこともない色や形の魚を自分たちの手で捌き、料理まで行なうという体験は、まさに記憶に残る旅といえる。

また、最近ニーズが高まってきているのが、「ホームビジ

ット」だ。これは平成一六年から行なっているメニューで、民泊のように住民の日常生活を体験することができるが、宿泊をとまなわないため、利用者側も受け入れる民家側の



体験プログラム「島の学校」の、おやつづくりの様様。

敷居も低い。そのため民泊の入り口にもなっているという。「まずはホームビジットでお客様と触れ合って、それで楽しかったから、今度は民泊もやってみようという民家の方も多いんです」と仲宗根さん。

現在、民泊事業の課題として、民泊を受け入れてきてくれた方々の高齢化が挙げられる。例えば、民泊を受け入れている一人暮らしの七十歳の男性の場合、食事などが負担となっている。この男性の場合、食事面さえ解決できれば、サトウキビ畑と一緒に汗を流したり、川遊びをしたり、島の人でもなかなか知らない穴場の洞窟を探検したりと、高齢とは思えないほどア

行政からのメッセージ

久米島高校の魅力化と民泊事業

久米島にある唯一の高校・沖縄県立久米島高等学校。園芸科1クラス、普通科2クラスの一学年3クラスで構成されており、少人数授業によるきめ細やかな指導により、近年では、琉球大学医学部や早稲田大学など離島の小規模校としては驚くほどの進学実績を上げている。

同校の大きな特徴の一つが、学校と町が協働で取り組んでいる「久米島高校魅力化プロジェクト」だ。これは、保護者・生徒・地域にとって、高校を魅力的な場所に変えていこうという取り組みで、2013年度よりスタートした。町が費用の9割を負担するハワイ留学制度や久米島高生専用の塾「久米島学習センター」の運営など、生徒たちの教育環境を向上させるためのさまざまな施策が行われている。なかでも、民泊事業と関わりのあるものは「離島留学制度」である。

同制度は、全国から久米島高への入学者を募るもので、島外からのさまざまな背景を持つ留学生と、島の子どもたちが交流することで、物事を多角的に見る視点を養うなど双方の成長につなげることを目的としている。2014年度に始まり、年間10名ほど、これまでに延

べ43名の生徒が、島外の中学校から久米島高へ入学している。なかには、久米島での民泊受け入れ家庭によるホームビジット体験をきっかけに、留学してきた子どももいる。

留学生たちは、町営の寮で生活を送る。そんな彼らにとって欠かせない存在が《身元引受人》である。身元引受人は、留学生にとっての島の親代わり。週末に食事をともにしたり、地域行事と一緒に参加したりと、知り合いも友だちもない環境に飛び込んできた彼らと地域とをつなぐサポートをしてくれている。じつはこの身元引受人は、民泊やホームビジットの受け入れを兼務している家庭も多い。民泊家庭をはじめ島の方々の持つおもてなしの心や、家族・親類のように迎え入れてくれる懐の深さは、久米島の離島留学制度の大きな魅力の一つだと言えるかもしれない。実際に「まるで本当の親みたい」と感じている生徒も多い。

留学生たちは、「これからも久米島に関わりたい」という思いを胸に高校を卒業していく。その思いの醸成に、民泊などの取り組みも一翼を担っているのではないか。

(久米島町「久米島高校魅力化事業」嘱託職員/元地域おこし協力隊員 岡本耕平)

クティブな体験ができる。いまは近所や知り合いに声をかけ、食事の手伝いをしてもらうこととで対応しているが、

仲宗根さんは、「宿泊をともしなう民泊は

厳しくなってきたが、子どもたちとの関わりは持ち続けたら方にとつて、ホームビジットが受け皿

になるかもしれない。以前、男子高校生がこのお宅で農業体験

をしたんです。この方は、かなりみっちりお手伝いをさせるので大丈夫かなと不安だったのですが、生徒たちは『自分たちが一番つらかったと思うけど、一番達成感もあった』と喜んで帰りました。きつと、教える方が真剣だから、その思いが伝わるんだと思います。民泊が難しくても、こういう方々のプログラムを提供できるようにしていきたい」と話す。

島に来た人に島人の笑顔を

島にある県立久米島高等学校では、平成二六年度より全国から生徒を募集する離島留学を実施している。民泊は、この離島留学にも寄与している。小学校五年生の時に民



町協会の
米島観光
仲宗根麻衣子
さん

泊で島に来て、その五年後、久米島高校に留学してきた生徒もいるという。

久米島には派手できらびやかなものはない。でも、本当に美しい大自然と、素朴でシャイで温かい島人たちがいる。また、包容力のある島で、いろいろな人をありのままの姿で受け入れてくれる。

民泊や島の学校、ホームビジットにおいて、やはり主役は「人」だ。仲宗根さんは「この美しい島に生まれ育った島人が、あたり前のように過ごす日々の生活の中にこそ、他にはない久米島ならではの特別なものがある。そしてそれが何より商品の魅力となっているんです。島に住んでいる人の幸せな顔を、島に来た人が見ることができる。それこそが、私たちにとっての『観光』です」と結んだ。



小田部早苗 (こたべさなえ)

1974年生まれ、茨城県出身。広告代理店でコピーライターとして広告制作を行う。平成30年5月、沖縄・久米島に移住。現在、久米島町観光協会の離島観光活性化事業において県外PR活動を担う。